

赤ちゃんの治療環境改善

新生児集中治療室（NICU）の医師として、日本では従来、ほとんど目を向けられてこなかった「赤ちゃんの痛みの緩和」にいち早く取り組んできた。

早く生まれたり、先天的な病気が見つかったりしてNICUに入院する新生児は、足裏からの採血や点滴など、痛みを伴う処置を一日に何度も受ける。だが、その痛みを言葉で表現することも、自分で対処することもできない。一方で、新生児期に痛みを繰り返し感じると、脳の発達などに影響するとされている。

赤ちゃんの治療環境を良くしようと、10年ほど前から他のNICUに先駆けて「シヨ糖液」を治療に取り入れた。甘く、鎮痛効果をもたらすとされ、赤ちゃんの口にごく少量を含ませることで痛みを和らげる。地元の製薬会社と共同で、医療現場で使いやすい個包装型の製品も開発し、普及にも力を入れた。現在は全国のNICUの半数近くで導入されている。ただ、産婦人科やクリニックへの普及はまだだ。「もっと裾野を広げたい」と力を込める。

学生時代、数ある分野の中

やま だ やす まさ
山田 恭聖さん (55)



から新生児医療を志したのは「新しさ」に心引かれたから。今よりNICUの認知度は低く、そこで働く医師も少なかった。「未来ある子どもたちのこれから何十年先と続く人生のスタートに関われる」と進路を決めた。

NICUではさまざまな専門職が携わる中、「赤ちゃんの家族もチームの一員」と考える。治療のために犠牲になりがちな親子の時間を重視し、家族の面会は24時間受け入れる。医師や看護師が病状や治療方針を確認する毎日の回診にも、家族に積極的に参加してもらっている。「親が

愛知医科大病院（愛知県長久手市）
周産期母子医療センター一部長



NICUに入院する赤ちゃんの痛みの緩和に取り組む山田さん

治療に参加し、子どものために何かを選んだり、決めたりすることで親子関係ができていく。私たちは病気を治して帰せばいいわけではない」。赤ちゃん一人一人と家族の人生に寄り添い続ける。

NICUのメンバーと結成するバンド「ヤマダオールスターズ」のメインボーカルという一面も。2年に1度の発表の場では、病棟で培ったチームワークを発揮している。岐阜県瑞浪市出身。

（熊崎未奈）

中日新聞／2024年2月27日

この記事・写真等は、中日新聞社の許諾を得て転載しています。